

高原の自然の中で  
～夏の風が吹き、馬と歩く～

鎌田直純

長い夏休みが終わり、子ども達はたくさん体験を通して、また大きな成長をしたことと思います。私も一回りたくましくなった彼らと再会することがとても楽しみです。

私は毎年の恒例となっている、信州の上諏訪でのキャンプに参加しました。それは若い友人達が集まるキャンプで、20人くらいの仲間が家族を連れて来ます。子ども達は0歳児から中学生くらいまで年齢幅があります。大人は語り合いながらのバーベキューが楽しみですが、子ども達は、昼間はアスレチック、夜は花火などをして楽しめます。そのような色々な世代の交流はなかなか楽しく、毎年参加しているのです。

キャンプの帰りに、八ヶ岳で生まれて初めて乗馬を体験しました。場所は小淵沢近くの高原の乗馬クラブです。最初に若い女性の調教師さんから基本的な技術を少し教えてもらい、すぐ森を一時間ほど駆けました。乗った馬はサラブレッドのような競走馬ではなく、よくしつけられたとてもおとなしい馬です。鐙（あぶみ）に乗せた足で馬の腹を蹴るのが「行け」の合図、手綱（たずな）で方向や「止まれ」の指示を出します。乗っているうちに、馬を支配しているのではなく、一緒に行動をしているという一体感が生まれ、仲間になったような気分です。昔の農家では、牛や馬が家族のように大切に愛されていたというのが、少し分かるような気がしました。柳田国男の「遠野物語」や宮沢賢治の多くの作品の中にも、人々と動物や自然との交感が描かれている作品がたくさんあります。想像力の中で感じる、人間と自然との対等な世界を、人類学者・中沢新一は〈対称性世界〉と呼んでいます。そしていまあらゆる面で対称性が失われ、非対称の社会になり危機に陥っていると指摘しています。〈対称性世界〉は古い時代の日本にはごく普通に、生き生きとして存在していたそうです。現代でも子どもの頃には誰でも心の中に存在しています。菊の子たちには、それらの世界を大人になっても持ち続けて、優しい気持ちで自分を取り巻く世界に接してほしいと思っています。